
教養教育科目における必修外国語「日本語」科目の改善に向けてⅡ

研究代表者 木下 謙朗（経済学部）

共同研究者 三原 龍志（文学部）

1. はじめに

日本政府の「教育未来創造会議」において、2033 年までに外国人留学生 40 万人の受け入れを目標とする方針が示されている。しかし、2024 年時点における、日本国内の外国人留学生の在学割合は約 5%である一方、本学では留学生比が約 3.1%にとどまっている。本学のグローバル化戦略「RYUKOKU GLOBAL VISION 2023」では、受け入れ留学生数を 700 名とする数値目標を掲げており、留学生数の拡充とともに、より高度な日本語教育の支援の両立が求められている。

本研究は、2025 年に向けた教養教育改革の一環として昨年度「教養教育・学部共通コース FD 研究開発プロジェクト」を継承し、学部正規留学生（以下、学部留学生）を対象とする「日本語」科目の日本語運用能力別クラス編成の適正化および測定手法の検討を目的とするものである。昨年度のプロジェクトでは、「日本語運用能力別クラス編成の有効な方策としてインタビューテストの代替となりうるか」が課題として明らかとなった。そこで今年度は以下の 3 点を重点的に、調査研究を行った。

- (1) 学部留学生の日本語運用能力を客観的に把握し、日本語運用能力別クラス編成を実施するための基盤を構築する。
- (2) 日本語運用能力の中でも口頭運用能力の測定方法について、時間的・人的コストの観点から効率性と妥当性を検討する。
- (3) 日本語教育のカリキュラム最適化を通じて、実践的な日本語運用能力の向上を図る。

2. 現状の課題

2.1. 学習者の多様性への対応の必要性

本学における教養教育科目「日本語」は、日本語運用能力が初級から上級までの幅広い学部留学生を対象としている。しかし、現行のカリキュラムでは個別のニーズへの対応が

十分に行われておらず、適正な学習環境の提供が課題となっている。

2.2. 日本語運用能力測定の課題

英語教育を始め外国語教育においては、Can-do（能力記述文）による評価基準が普及し、特に欧州評議会の CEFR（Common European Framework of Reference for Languages 以下、CEFR）が外部指標として広く活用されている。日本語教育においても国際交流基金が CEFR を参照した『JF 日本語教育スタンダード 2010』（以下、JF 日本語教育スタンダード）を 2010 年 3 月に正式版として発表しており、文化庁も文化審議会国語分科会が CEFR を参考に 2019 年 6 月より「日本語教育の参照枠」を策定に向けて審議を進め、2021 年に日本語教育に関わる全ての者が参照できる日本語学習、教授、評価のための枠組みとしてその報告書を発表している。本学では交換留学生を対象とした Japanese Experience Program in Kyoto（以下、JEP Kyoto）の JEP Kyoto-J および留学生別科において 2015 年度より「SPOT（Simple Performance-Oriented Test）」（以下、SPOT）と CEFR および「JF 日本語教育スタンダード準拠ロールプレイテスト」を参考にインタビュー試験を行い、クラス基準を設けているが、学部留学生に関しては、学部単位で主に「日本留学試験」および入学時面接で日本語能力を判定しており、上記のような外部評価指標は導入してこなかった。

2.3. 客観的評価基準の確立の必要性

2023 年度「教養教育・学部共通コース FD 研究開発プロジェクト」において、36 名の学部留学生を対象にインタビューによる日本語運用能力の測定、SPOT による日本語の知識を測定した。その結果、日本語運用能力では、CEFR の A2 レベルから B2 レベルまでの学生が混在していること、また、日本語知識のレベルにおいては、初級レベルから上級レベルまでの学生が混在していることが明らかとなった。そこで、今年度は、まず日本語運用能力を測定するインタビューテストの手法（JF ロールプレイテスト）に加え、より容易に日本語運用能力が測定できるとされる日本語口頭能力試験（Japanese Oral Proficiency Test、以下、JOPT）について実証的研究を行った。

3. 調査および分析

3.1. 国際交流基金関西国際センターでの調査

・実施日時・場所

日時：2025 年 2 月 17 日 10 時～12 時

場所：国際交流基金関西国際センター

・面談者：熊野七絵主任専門員、および研修担当専門員 2 名

・得られた知見および成果

本学の JEP-Kyoto および留学生別科における CEFR および JF スタンダードを参照したプレイスメントテストの実施状況と課題を報告し、正規留学生対象の日本語科目のカリキュラム再編に向けた情報収集を行った。主なヒアリング項目は以下の通り。

・時間的・人的コストを抑えつつ、JF ロールプレイテストによるインタビューテスト並みの信頼性を持つ簡易的なレベル判定の実施可能性（A2/B1/B2）

・正規留学生の自己評価を促し、自律学習につなげるための指導方法

調査の結果、CEFR や JF スタンダードを活用した簡易レベル判定手法が有効であることが示唆された。また、自己評価を組み込むことで、学習者の主体的な学習態度を引き出す方策の重要性が指摘された。

3.2. JOPT（Japanese Oral Proficiency Test）セミナーの実施

・実施日時・場所

日時：2024 年 8 月 5 日（月）13 時～14 時 30 分

場所：龍谷大学深草学舎 和顔館 1 階マルチリンガルスタジオ

・参加費：無料（事前登録制）

・講師：坂口昌子氏（京都外国語大学）、白鳥文子氏（京都外国語大学）

・プログラム

JOPT（Japanese Oral Proficiency Test）の概要説明

模擬的実践

質疑応答

・得られた知見および成果

JOPT は 15 分間の対面式テストであり、比較的短時間で実施が可能であることが確認された。また、学習者自身による自己評価の活用が有効であり、自己学習の促進に寄与する可能性が示唆された。

3.3. 日本語運用能力（口頭運用能力と知識）の収集・分析

上記の国際交流基金関西国際センターでの調査と JOPT セミナーで得られた知見を踏まえ、現在の学部留学生の日本語運用能力（口頭運用能力と知識）を把握することを目的とし、2024 年度に入学した留学生（26 名：経済学部 10 名、経営学部 7 名、政策学部 4 名、心理学部 1 名、社会学部 3 名、農学部 1 名）に「JF ロールプレイテスト」と「JOPT」の二つのインタビューテスト、およびオンライン日本語テスト「SPOT（Simple Performance-Oriented Test）」を実施した。

国際交流基金が口頭で課題遂行能力を測るためのテストとして開発した「JF ロールプレイテスト」は、約 15 分でロールプレイを通して口頭でのやりとり能力を測り、CEFR および JS 日本語教育スタンダードの参照枠を使って判定できる。

「JOPT」は、日本語のスピーキング能力を測定する試験で、主に、日本語を第二言語（L2）として学ぶ学習者を対象にし、会話能力を客観的に評価することを目的としている。約 15 分でイラストやグラフを資料にして説明やプレゼンテーションを行い、発音、流暢さ、語彙、文法、応答の適切さなどの観点から 5 段階のレベル評価が行われる。試験形式には、特定のトピックについて話すモノローグや、試験官との対話形式のセクションが含まれることが多い。これにより、実際の会話場面における受験者の能力を測ることができる。

「SPOT」とは母語話者の自然な話速度の読み上げ文を聞きながら、解答用紙に書かれた各同文を読み、空欄にひらがな一文字を入れるテストである。今回は「SPOT90」・「Grammar90」・「漢字 SPOT50」の 3 テストで日本語の知識を測定した。

3.3.1. JF ロールプレイテスト判定データ分析結果

JF ロールプレイテスト結果から、口頭運用能力においては CEFR A2.2 レベル 4 名（15.4%）、B1.1 レベル 11 名（42.3%）、B1.2 レベル 8 名（30.8%）、B2.1 レベル 1 名（3.8%）、B2.2 レベル 2 名（7.7%）という結果となり、CEFR の B1 レベルが大半を占める一方で、A2 レベルと B2 レベルの学生が混在していることが明らかになった。

3.3.2. JOPT 判定データ分析結果

JOPT の総合評定は JOPT1 から JOPT5 までの 5 段階に区分されている。JOPT1 の自立度と依存度のプロフィシェンシーは「どんなに依存が可能でも、ほとんど自力でやって

いけない」、JOPT5 については「ほとんど自力でやっていけるため、他への依存は必要ない」という指標が示されている。

JOPT 結果から、JOPT2 は 2 名 (7.7%)、JOPT3 は 8 名 (30.8%)、JOPT4 は 11 名 (42.3%)、JOPT5 は 5 名 (19.2%) となり、「だいたい自力でやってはいけるが、ある程度の依存を必要とする」レベルのプロフィシエンシーである JOPT4、「なんとか自力ではやっていけるが、かなりの依存を必要とする」レベルのプロフィシエンシーである JOPT3 相当が大半を占める一方で、「かなりの依存が可能でも、自力でやっていくのは難しい」JOPT2 相当の学生の存在も明らかになった。ただし、JOPT1 から JOPT5 までの 5 段階が CEFR や日本語教育の参照枠、日本語能力試験のどのレベルに該当するのかは不明である。

3.3.3. SPOT の結果

言語知識 (SPOT) においては、獲得した得点によって、それぞれ入門 (Grammar90 においては未習者)、初級、中級、上級 4 レベルに解釈できる目安が示されている。

「SPOT90」は中級 21 名 (80.8%)、上級 5 名 (19.2%)、「Grammar90」は初級 2 名 (7.7%)、中級 21 名 (80.8%)、上級 3 名 (11.5%)、「漢字 SPOT50」は中級 4 名 (15.4%)、上級 22 名 (84.6%) という結果になった。このことから、漢字語彙の知識や音声処理能力の高い学生が多い中、文法知識においては初級・中級・上級と 3 つのレベルに広がっていることが判明した。

3.3.4. JF 判定データと JOPT 判定データの比較

「JF ロールプレイテスト」と「JOPT」のインタビュー評価については、3 名の日本語教育専門家がそれぞれ評価を行った後に評価者間で評価結果を照合し、傾向を分析した。その結果、「JF ロールプレイテスト」と「JOPT」の二つには強い相関関係がみられたことから、二つのインタビューテストにおける評価の一貫性が高いことが示唆される。また、「JF ロールプレイテスト」と「SPOT」、「JOPT」と「SPOT」にはそれぞれ強い相関関係がみられ、その中でも「JF ロールプレイテスト」に比べ「JOPT」と「SPOT」の「日本語総合力」や「SPOT」に強い相関関係がみられた。「SPOT」は日本語運用能力を総合的に測定する指標ではあるが、インタラクティブな方法で測定するのではなく、聞き取りをしながら文法や語彙、聴解、読解などの要素を総合的に評価する方策であることを考

えると、受験者の日本語知識を測る傾向が強く実際の会話や流暢さのコミュニケーション能力を測定しているものではない。これらを考慮すると「JOPT」は「JF ロールプレイテスト」に比べ、日本語知識を測る傾向が強いのではないかと推察される。

4. まとめ

本研究では、教養教育科目「日本語」における日本語運用能力別クラス編成の最適化を目的として、学部留学生の日本語能力の測定および評価手法の検討を行った。

「JF ロールプレイテスト」と「JOPT」のインタビューによる口頭運用能力測定の結果と「SPOT」による知識測定の結果について分析をした結果、口頭運用能力測定については「JF ロールプレイテスト」と「JOPT」は、両者のインタビュー実施時間が 15 分程度という時間的な面からみても相互に代替が可能である可能性が示唆された。一方で、「JOPT」は被験者の一方的な発話のデータを評価するため、その標準化の必要性浮き彫りになった。特に、評価者の主観による影響を軽減するための基準設定とインタラクティブな口頭運用能力の評価方法が求められることが明らかになった。また、「JOPT」は「JF ロールプレイテスト」に比べて判定に数倍時間がかかるため、時間的・経済的に問題がある。さらに、「JOPT」は日本語教育の参照枠とのレベルと紐づいていないことから、「JOPT」で得られた結果をクラス編成に利用するには、現時点では導入に課題が残る。

「JOPT」の「話す」口頭能力の評価の有効性を確認するとともに、「評価の標準化」および「口頭によるやりとり能力の評価」が課題であることが明らかになった。今後は、「SPOT」、「JF スタANDARD」によるインタビューテスト、日本留学試験結果、JOPTを活用したデータの蓄積を行い、学習成果の向上に寄与する教育プログラムの設計を進めることが求められる。さらに、これらの指標を用いたクラス編成の妥当性（実践的な日本語運用能力の向上）については、縦断的に学生の日本語運用能力および大学での学び（アカデミック・ジャパニーズ）について調査をしていく必要があると考える。

日本語運用能力の判定にかかる経済的・人的コストを考慮すると、今後は生成 AI や音声認識技術を活用した評価手法の開発・導入も検討する。

国際交流基金(2010)『JF 日本語教育スタンダード 2010』

(<https://www.jfstandard.jp/go.jp/top/ja/render.do>)

アクラス日本語教育研究所「JOPT に関する記事一覧」

(<https://acrasweb.jp/?cat=15>)